

---

# コロン ~ 僕を変えた一匹の家族 ~

リーダー@通りすがりの転校生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コロンと僕を変えた一匹の家族

### 【Nコード】

N6351Y

### 【作者名】

リーダー@通りすがりの転校生

### 【あらすじ】

これは『夢』を持ってなかった少年と一匹の子犬の物語。

この1人と1匹の突然の出会いが少年の人生を大きく変える。

## プロローグ（前書き）

はじめまして皆さん、リーダー@通りすがりの転校生です。今回は初投稿ということで、表現、話の構成など未熟な点が多く読みづらいつと思われれるかもしれませんが、どうか暖かい目で見守ってあげてもらえると嬉しいです。

## プロローグ

目の前には一匹のミニチュアダックスフンドがいた。産まれて間もない子犬だ。手を差し伸べるとヨチヨチと、短い足をしっかりと動かして手の平に登ってくる。その子犬がコロンと手の平で転んで・  
・  
・

「いきー！ずき！和樹ッ！早よ起きんねっ！」

母・里子の怒声が聞こえ、少年は目を覚ました。まだ意識がはつきりとしていないが、とりあえず重たい体を起こす。

「うっくん。なんか良い夢だった……あれ？どんな夢だったけ？うむ……」

そう言っただけ夢の内容を思い出そうとすると、

「学校遅刻するよっ！」

またも母の怒声が聞こえ、少年は時計を見ると針が寝過ごしている事を知らせていた。少年は急いで立ち上がり服を着替え始めた。

「やべえ！寝過ごした！急がねーと遅刻するッ！」

そう叫ぶ少年――辻神和樹――彼はまだ知らなかった。これから訪れることになる出会い、そしてその出会いが彼の人生を大きく変え



## プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？まずはここまでです。話の流れはある程度まとまってきたので、これからほとんどん続きを書いていこうと思います。次回は登場人物の設定です。

**登場人物紹介・その他の設定など（前書き）**

とりあえず現段階での登場人物紹介です。

## 登場人物紹介・その他の設定など

登場人物紹介：現段階での紹介なので、後々でないキャラを紹介していこうと思います。

辻神和樹つじがみかずき：15歳 男

福岡在住の中学3年生、市内の私立中学に通う。特に何かを目指すわけでもなくとりあえず親からの薦めで中学受験をし燃え尽きている。引つ込み思案な性格だが他人の事を気遣う優しさを持つ。夢が持てないことに深く悩む。

辻神里子つじがみさとこ：39歳 女

和樹の母、他人の前では猫を被るが家出はかなりの尼將軍っぷりを発揮する。かなり短気。

辻神信彦つじがみのぶひこ：41歳 男

和樹の父、かなり温厚な性格。滅多に怒らないが怒らせるとんでもないことになる。出張することが多い。

コロン

和樹の入学祝いとして辻神家にやってきたミニチュアダックスフンド、コロコロと転がることから和樹によってコロンと命名される。

可愛い（笑）

野本一樹のまひかずき15歳

和樹の親友、同じマンション、同じ学校、同じ名前で小学校からの付き合い。和樹のことを辻と呼ぶ。

宮本大介みやもとだいすけ38歳 男



和樹のクラスの担任。教科担当は数学。鬼のように宿題をだす上にテストが難しすぎるといふことで、生徒からの評判は悪い。和樹の夢が持てないという悩みを心配する。

舞台設定：話の舞台は福岡です。福岡弁や福岡の地名をどんどん出していききたいと思えます。

**登場人物紹介・その他の設定など（後書き）**

とりあえずここまでです（汗）

次回

早速コロンがでてきます！挿絵も入れられたら入れようと思います。  
乞うご期待。

## 第1話 出会い（前書き）

さあ、ようやく1話です！お話を書くのってやっぱり難しいですね  
（汗）

多少読みづらくなったかもしれませんが、最後の方はいい感じになってるとおもいます。

それではコロンと和樹の出会い、どうぞお楽しみ下さい。

## 第1話 出会い

まだ朝日が昇ったばかりの午前6時、いつものように辻神家のインターホンが鳴り、和樹が玄関を開けるとそこには野本和樹がいつものように迎えにきていた。

「辻、早よせんとバス行くばい！」

野本は和樹と同じマンション、同じ階に住み、しかも名前まで同じということもあって、和樹の1番の親友だった。

「早よせんと置いてくぞお！」

また野本の声が聞こえると、

「わかった、わかった。すぐ行く！」

と、和樹はなだめつつ急いで準備を整えた。

和樹と野本は現在バスで1時間ほどの所にある大堀中学校という私立中学に通っている。偏差値は福岡の中学の中では上位にあたる超進学校だが、通学時間が1時間に増えたことは和樹にとっては苦痛以外の何ものでもなかった。

「辻、今日の宿題やった？」

バス停まで歩く途中、野本はいつものように和樹に尋ねてきた。

「やってるけど、お前またやってねーの？」

「いや、昨日はなんかやる気がおきんかったっちゃんね。」

「……………もう見せんぞ。」

いつもの頼みを軽くあしらいながら、和樹は今朝の夢の内容を思い出そうとしていた。

（どんな夢だったっけ……………なんか妙に楽しかった気がするんだけど……………）

「和樹！聞いてると？」

そこで和樹の思考は中断させられてしまった。

「うるさいなあ……………聞いてるって。」

「じゃあ何にするとよ、進路。」

「え？」

「ほらーやっぱり聞いてなかった。クソ宮本が言っとなやろ？まあ授業潰れるのは嬉しいけど。」

「進路……………ねえ。」

和樹はため息をつくかのように吐き出した。

和樹には今、1つの悩みがある。それは『夢』がないこと、というよりも、自分からこうしたい！と強く望むことがないことであった。

中学受験をしたのも両親がしておけというからしただけだし、実際学校での成績は良い方で、周りの先生からの評価もよくなった。しかし、それも結局は望んでしたことではなく、これから先はどうしたい？と問われると、きっぱりと答えられるような答がないのである。

「うーん……………」

(夢だったってなあ……………)

和樹が野本にどう返そうか、と悩んでいる内にバスがきた。相変わらずの満員である。この満員バスも和樹の苦痛の内の1つであった。和樹達が住んでいるのは市内から少し離れた所でバスの本数が非常に少ない場所なのである。だから、1本のバスに乗る乗客量がハンパではないのである。しかも1番混み合うのは朝のこの時間帯だった。

「えーまた席なかやん。」

と、野本が定番となったセリフを放つ。

「いつものことだろ。それよりほら。」

それを軽くあしらいながら和樹は野本に宿題を手渡す。

「お？いいねえーさすが辻っ！」

「わかったから早く静かにしなさい。」

次のバス停で乗客が降り席があくと、宿題を渡すやいなや野本はす

ぐに席をとり、自分のノートに写し出した。揺れるバスの中では字もまともに書けないだろうに、と思いつながら隣に座ると和樹はまた眠る態勢を整えた。このバスの中での睡眠が朝の不足している睡眠量を補う良い機会だった。

(同じ夢が見れますように……………。)

そう念じながら、和樹はあっさりと眠りに落ちた。

## 大堀中学校

バスを降りて野本と別れると、和樹は自分の教室、3-2までたどり着き、早速授業の準備を始めた。1限目は数学、生徒からの評判は悪いが授業は面白い、そして2組の担任でもある宮本大介の授業だった。しかし、今日はいつもとは違い、宮本は教科書を持っておらずたくさんのプリントを抱えていた。

「今日は授業時間を使ってSHRをやるうと思つ。」

その瞬間教室の後ろから歓声が上がった。クラスのボス藤田大輝である。藤田はケンカが強く、ガキ大将という言葉がよく似合うほど大胆な性格だが、成績は学年1位という天才でもあるため、自然と2組のボスとなったのである。

「藤田！授業じゃないが今からやるのは大事な事だからしっかりと話を聞いておくように！」

宮本は慣れきっているのか、冷静に注意をただけでこれを鎮めてしまった。この辺りを見るとやはりこの人はベテランなんだなあ、

と和樹は思いしらされた。

「今日は突然だが、皆にこれからの進路について書いてもらう。皆も来年は受験生だ。将来への目標があるやつとないやつとでは、成績にも大きな違いがでてくる。しっかりと考えて書くように。」

と言いながら宮本はプリントを配りだした。プリントには将来の目標と書かれており、その下には広々とスペースがとってあった。

「何を書いても構わない。だからと言ってふざけた答えを書くやつは居残りだからな。」

宮本が釘を刺すやいなや一斉にシャーペンの音が教室内に響いた。この辺の切り替えの速さは受験生だったころの賜物だろう。しかし、和樹はシャーペンを持つ手を動かさないでいた。

(進路つたってなあ……………まあ適当に書いとくか)

悩んでても仕方ない。そう自分に言い聞かせた和樹は、とりあえず文句をつけられないような答えをプリントに書き込んでおいた。

(俺にも夢……………できるのかな?)

その問いに反応するかのよつにチャイムが鳴り、1限目が終了した。

辻神宅

「ただいまあ。」



授業が終わり、帰宅すると、

「おかえり。」

里子が既に帰ってきていた。

「なんか今日は早かね。」

「今日は和樹の入学祝いが届くとよ!」

そういう里子はどこか楽しそうだ。

(なんで俺へのお祝いなのに喜んでんだよ。)

そう思いつつも遅めの入学祝いについて少し考えてみた。

(Wiiかな?前欲しいって言ってたし。あ、PSPとかかな?今さらになって入学祝いってことはきつと豪華な……)

あれこれ考えている内に和樹の想像は止まらなくなってきた。

「父さんが持って帰ってくるはずだから、それまで宿題と予習やっときい。」

「とつつあんが持ってくるのか、わかった。」

と返しながら、和樹は自分の部屋に戻ると急いで宿題に取りかかった。勉強に集中するときほど時間の経過は早くなるという性質を活かす算段だ。

(早く帰ってこいよとっつあん。)

和樹は心なしかペンを動かす手が早いような気がした。

午後9時

「ただいまあ。」

父・信彦の帰宅である。

「おかえりい！」

里子よりも早く和樹が反応した。

「おう！和樹！今日はお前にプレゼントが……………」

「知ってる！」

信彦の言葉を遮り和樹の視線は信彦の持つ大きな箱に釘付けになった。

「ねえ！これなに？Wii？Xbox？」

すると信彦は笑いながら、

「そんなものよりもっと良いものだ。昔お前が欲しい欲しいって言ったものだぞ。」

「？」

「まあ、とりあえず開けてみい。」

和樹は期待を胸に箱を開けた。

「え？」

そこに居たのは和樹のどの予想にも当てはまらないものだった。

「い……………犬う？」

そこには小さなミニチュアダックスフンドが丸まってスヤスヤと眠っていた。

「え？ちよ……………なんで？」

和樹は目の前の光景が信じられなかった。

「なんで？つてお前が前に飼いたいって言つとつたやんか。」

信彦が言っているのは、ある日《今日のわんこ》で流れていたミニチュアダックスフンドを見ている和樹が唐突に言ったセリフ。

『とつつあん、俺犬が飼いたい。』

『お前簡単にいうばつてん、犬飼うのは色々大変とよ？』

『世話は俺がやるけんさ。』

『まあ気が向いたらな。』

当の和樹はそんなやりとりがあった事などすっかり忘れており、

「まさか犬とは……………」。

驚きを隠せないでいた。すると箱の中の子犬はその声で目が覚めたのか、ゆっくりと伸びをすると、自力で起き上がり、ゆっくりとゆっくりと和樹の方に向かって歩いてきた。

「お？こいつ和樹の事好いとかね？和樹抱いてやり。」

信彦が笑いながら和樹に進める。

「抱いてやれったって……………」。

「手の平に乗せるぐらいでいいけん、ほら。」

和樹は恐る恐る手を差し伸べてみると、子犬はその手の上に短い足をヨチヨチと動かしてゆっくりと登ってきた。その黒い毛並みはフカフカとしており、眉の辺りは茶色のマロ眉で、またその体は出来上がっていないのか、とても柔らかく崩れてしまいそうだった。しかし、何よりも和樹を驚かせたのはその暖かさだった。その小さな体から発せられる熱は手の平通してゆっくり、そしてじんわりと和樹の中に伝わっていた。

「暖かい……………」。

手の平でコロんと転ぶ子犬を眺めながら、和樹はそう呟いた。

「名前ば決めてやりいよ、和樹。」

その光景を見ていた里子が和樹に提案した。

「うーん。名前、名前……。」

和樹が考えていると、またも手の中の子犬はコロんとこけていた。その光景が和樹にはなんとも可愛らしく写った。

「……………コロん。」

「「え？」」

両親が同時に聞き返す。

「コロんって転がるからコロん。こいつの名前はコロんだ。いいでしょ？」

「コロん……かあ。まあいい名前っちゃない。」

「ネーミングセンス無い和樹にしてはいい名前やん。」

両親ともに笑いながらも賛同することに変わりはないようだ。

「よし、今日からお前はコロんだ。よろしくな！コロん！」

そう言うと、コロんはまるでそこ呼びかけに反応するかのようになり、和樹の方を向き、チロチロとその手を舐めた。和樹の手に包まれながらもコロんは確かにその生命の温もりを和樹に伝えていた。

## 第1話 出会い（後書き）

どうでしたか？そろそろ私の構成も無茶苦茶になってきました（笑）

コロナのところの描写は特に気合い入れてるので少しはまともになってると思います。

さて、次回はコロナを迎えた和樹の新しい生活が始まります。お楽しみに？

## 第2話 変化（前書き）

更新遅くなりました（汗）2話目です¥（／／／／／）やっぱり方  
言って難しいですよね……でもこの方言はどういう意味なんだろう？  
って考えながら読むのも楽しみの1つだと思っんでこれからも入れ  
ていこうと思います。この機会に福岡に興味を持っていたらと  
嬉しいです！それでは第2話どうぞ（^-^）／

## 第2話 変化

午前6時いつもの通り和樹は目を覚ましリビングに向かった。いつもの通り父と母は仕事に向かい、家には1人………のはずだった。しかし、和樹の目の前には一匹の子犬がリビングを走り回るといふ光景が写っていた。

「おはよう。昨日は眠れたか？」

返事がくるわけないとわかりつつも和樹は目の前の子犬「コロン」に話しかけると、コロンはパツと和樹の方を振り向き、和樹目掛けて一気に走ってきた。

「うお！………本当に飼ってるんだな………犬。」

和樹は未だに自分が目の前にいる子犬の飼い主なったという実感がわかなかつた。どうやら餌は母が置いていてってくれたらしい。父がゲージやオモチャなど様々なものを買ってきたおかげで、コロンの生活用品は完備されていた。

「ああ〜そろそろ準備しないと野本のモがくるな。」

和樹が登校の準備に取り掛かろうと立ち上がると、それについて行くようにコロンも後ろ歩く。

「本当なら散歩とか連れて行ってやりたいんだけどな。」

母が言うにはコロンは子犬が受けなければならぬワクチンを摂取したばかりで2週間ほどは外出禁止らしい。しかし、部屋中を走り



回る姿を見るだけで和樹は何か胸がじんわりとほぐれる。そんな気持ちになっていた。

一通りの準備が終わると、

ーピンポーンー

とチャイムがなるのが聞こえた。

「はい、はいはい……………」。

そう言いながら玄関を開けるとそこにはやはり野本の姿があった。

「おっす!」

そして定番の挨拶である。

「おっ!さあ、早く行こうぜ!」

それに対して和樹が返事をする、

「?……………どうしたん?なんかあったと?」

野本は不思議でたまらないといった様子で和樹に尋ねた。

「え?なにが?」

「いや、いつもの仕ならもっとサラッと受け流すのに珍しくちゃんと応えるからさ。」

言われてみれば、今日はなんだか気分がいい。

「まあな。ちょっと色々あってな。」

と和樹はニヤけながら応じる。

「なんだよお？」

野本は気になってしょうがないといった様子だ。

「実はな……犬飼ってるんだな、これが。」

「マジで？見してよ。」

「まだ無理だから今度な。」

「えー。じゃあ今度な、絶対ばい。」

「わかった、わかった。」

そう応えながら2人はバス停へと歩きだした。

大堀中学校

和樹の頭の中は coron のことでは いっぱいだった。手には昨日の温もりが未だに残っている。あの温もりがいつも近くにいる。そう思えるだけで和樹はとても幸せな気分になっていた。

(今日は帰ってからどうしよう……とりあえずナデナデして……それから……)



和樹の隣には何時の間に来たのか野本がいた。ちなみに野本もバトミントン部である。

「急にでてくんなよ、気色悪い。」

「ごめん、ごめん。そんなこと言うなよ。」

野本は苦笑いを浮かべながら謝罪を入れる。

「にしても本当に遅いなあ。」

そう言いながら2人がウォーミングアップを始めようとすると。

「ああ〜めんごめんご、遅くなったわ〜。」

声の聞こえる方を見ると、そこにはバトミントン部最強の男、清麻呂きよまろ芳樹よしきがいた。

「芳樹先輩何してたんすか？」

「いやあ〜カロリーメイト食った。」

「でもお菓子の持ち込みは禁止じゃ……………」

「小さいことを気にしてたらいつまでたっても強くはなれんぞ？」

「……………」

あまりにも素早い切り返しに和樹は言葉を失ってしまった。そんな調子で練習が終わると、

「あ、そういえばGODは犬飼ったとよね？」

芳樹は辻神の神をとってGODと呼ぶが和樹はそれを嫌がっていた。

「先輩、GODはやめてください。てか、なんで知ってるんすか？」

「野本から聞いた。」

何故かどや顔で応じる芳樹。

(またあいつはペラペラと話しやがって……………。)

「GOD、愛犬との時間は大切にしろよ。」

「？」

「俺も昔飼ったよ、犬。」

「マジっすか？」

「大マジたい。なかなか時間なくて一緒にいてやれなかったっちゃんね。そうなると後々本当に後悔するからな。今を大事にするんが1番よ。」

「でも、まだ産まれたばかりですよ？」

と和樹は笑いながら応じる。

「馬鹿だなあ……………産まれたばかりだからこそ大事になってくる

とよ。」

芳樹はまるでわかってないと言いたそうに和樹を見ていた。

午後8時・辻神宅

「ただいまあ。」

和樹が帰宅すると、リビングの方からクウーンと鳴き声が聞こえてきた。

「ただいま、コロソ。」

そう言っつてコロソをゲージから出すと、一気に和樹に飛びかかってきた。

「うお！わかった、わかったから落ち着きなさい。」

となだめようとするがコロソにそれがわかるわけでもなく、和樹はひたすらコロソになされるがままとなっていた。

「ふう〜びっくりした。それにしても犬なのに『ワン』って泣かないんだな。」

そう。産まれたばかりの子犬は声帯が発達しておらず我々が聞き慣れているような鳴き声を出せないのだ。

「でもこっちの方が可愛いよな……………」

まだ2日しか経っていないにも関わらず、既にコロソは和樹に慣れ

きつていた。和樹がソファに座るとヨチヨチと側まで寄ってきて、まるで乗せると言わんばかりに鳴くのである。そつと抱き上げると、そのままコロンは和樹の脚の上でクルツと丸まり寝るのである。

（可愛かあ……………いつまでもこうしていたいな……………。）

そう思っていると、芳樹に言われた言葉が脳裏を駆け巡った。

「今を大事に……………か。別れる日なんて本当にくるのかな？」  
あり得ないとは思いつつも、もしそうになったら……………と考え始め  
そうになった和樹は、コロンをひたすら撫でまくり気にしないように  
に努力した。

「そついえば家に1人でいないなんて初めてだな……………。」  
コロンの頭を撫でながら和樹はそう呟いた。両親共働きの辻神家は  
どちらとも帰宅時間が遅く、基本的に家には和樹1人だった。その  
ため1人でTVを見るのが当たり前だった和樹にとつて、両親以外  
の何かと家で過ごすというのは大変珍しいことだった。

「よし！今日は宿題早めに終わらせて一緒に寝るばい！」

和樹が今のコロンとやりたいこと。それは一緒に寝ることだった。

風呂から上がり、コロンを抱えてベッドに半身になって寝転ぶとコロンはまるでわかっていたかのように毛布の中に潜り込み、和樹のお腹の当たりでクルツと丸くなり毛布から顔を少し出した状態でこちらを見た。その光景に癒された和樹はゆっくりと眠りに落ちた。

こうして和樹とコロンの新たな生活が始まった。



## 第2話 変化（後書き）

2話目終了です。今回は少し短めになってしまいました。しばらくは和樹の学校生活を中心とした話になってしまふと思いますが、ちゃんとコロンはでてきます！また学校生活でてくる色々なキャラクターのことも楽しんで読んでもらえると嬉しいですよ。

次回はコロンが内に来てから初めての休日。和樹はどう過ごすのでしょうか？それでは次回もお楽しみに（＾－＾）ノ

### 第3話 夢と休日（前書き）

更新遅くなりました……………テストやらで色々遅くなってしまってますいません（ー；）

それと設定に無理があるとの指摘を受けましたので設定を一部変更しました。多少は内容に影響がでるかもしれませんがご了承下さい。

それでは3話どうぞ！

### 第3話 夢と休日

コロンが家にきてから1ヶ月が過ぎた。犬の成長とはとても早いもので、体は一回り大きくなり鳴き声も弱々しい声ではなく大きく『ワン』と発声するほどとなっていた。また、この頃から朝と夜の散歩が和樹の日課となっていた。起床時間は今までより1時間も早くなった。しかし、疲れは思ったほど溜まらず、一日寝れば体力はほぼ完全に回復するため、生活リズムはさほど崩れてはいなかった。

そんなある日の休日、和樹はコロンを連れて近所の公園にきていた。暇さえあればこの公園でコロンと遊び、空を眺めて時間を潰していた。空ほど見ていて楽しいものはない、和樹はいつもそう思っていた。どこまでも青い、かと思えば点々と白い雲がそれを覆い、雲が去っていくとそこにはまた青い空と太陽の輝きが視界をおおう。その一連の流れを見ているだけで嫌なこと、辛いこと、悲しいこと、つまらなかったこと、全てを洗い流してくれるみたいだった。そしてそんな空には、かつて和樹が抱いていた『夢』があった。かつての『夢』それはパイロットだった。何故？と聞かれると答えは色々ある、しかし1番の理由は「空が好きだから」だろう。あの青い空から眺める地上の景色に酔いしれ、その感動を自分だけでなく乗客にも与えられる。そんなパイロットという職業に和樹は深い憧れをいだいていた。そう、何も知らない幼い頃は………しかし、憧れや興味を持ちパイロットの事を深く知っていく内に現実とのギャップに打ちひしがれてしまった。いついかなる状況でも常に最善かつ効率的な判断を下す冷静な心、そして機体のスペック、その日の天候など、全てを把握できるだけの記憶力、そして先の先まで見渡せることのできる視力、どれをとっても自分には足りていない。そのあまりにも高すぎるハードルを前に和樹はいつしか夢を見ることをやめてしまっていた。

「ワン！……！！！」

その思考を断つかのようにコロンの鳴き声が聴こえ、和樹はハッと  
した。見るとその口にはどこから拾ってきたのかテニスボールが啜  
えられていた。

「お前………どこからとってきたとや？」

「ワン！……！！！」

まるでどうでもいいだろと言うかのように吠え返すと尻尾をパタパ  
タと振りながらボールを落とした。

「はいはい、わかったから………」

そうやってボールを投げてやるとコロンは脱兎の如くボールを追い  
かけていった。その姿を目で追いながら、

「お前は自由でいいよなあ………」

まるで溜め息をつくかのように和樹は呟いた。

### 第3話 夢と休日（後書き）

いかがでしたか？今回はあっさりと終わってしまいました（汗）

次回はもう少し内容のある話にしようと思っております。

では次回をお楽しみに。

#### 第4話 生と死の狭間で（前書き）

気分が乗ってたんで一気に書き上げてしまいました。まだ4話目ですが一気に展開が進みます（笑）

まあなにはともあれお楽しみください。では第4話、どうぞ！

#### 第4話 生と死の狭間で

『人生とは何が起こるかわからない』確か誰かがそんなこと言ってたよ。うな気がする……………でもこんなのってアリかよ？

薄れゆく意識のなかで和樹はふとそう思った。

(さすがに……………ヤバイわ……………)

重たい体を動かそうとしたのを最後に、重い闇が和樹の視界を閉ざした。

……………目の前でコロンが吠えていた。

————ワンッ————

(コロン……………)

————ワンッ————

コロンは呼びかけるように吠えると何処かに向かって走り去って行った。

(わかったよ、今行くよ。)

和樹はそれを必死に追いかけるがいつまでたっても追いつかない。

( 待てよ！おい…………… )

どんどん距離が離されていく。とうとう姿が見えなくなった。それでも必死に追いかける。すると一点の光が見えた。

( そこか！………… )

その光に向かっていくと光はどんどんどんどん大きくなった。徐々に増える光はやがて和樹の視界を多い……………

和樹はゆっくりと目を覚ました。視界がぼやける中でまず始めに見えたのは白い天井だった。

「 じい……………は？ 」

口には酸素マスクが付けられていた。頭は上手く働かないし体には力が入らない。事態がはつきりと読み込めない状況で、和樹はとりあえず今自分は入院しているんだという事だけは把握できた。

( なんて入院したんだっけ？…………… ああ、そうだ、確か車に轢かれて…………… )

普通の外出だった。スーパーまでおやつと昼食を買いに行くだけのはずだった。最後に見えたのは急に視界に現れた車だった。気がついたときには和樹の体は宙に浮いており、その直後に思いっきりコ



ンクリートに叩きつけられていた。

(そうか……………助かったんだ……………)

まだ生きてる。その事実には和樹は深く感動し、目頭が熱くなるのを感じた。生まれて初めての死の恐怖、そして生きていることの喜び。全てが和樹の中で一斉に駆け巡っていた。頬を伝う涙はいつまでたっても止まらず、枕元は涙でグツシヨリと濡れていた。

「まだ……………生きてる……………」

途切れ途切れ、だが確実に和樹は自分に今ここにある現実を言い聞かせていた。しばらくして、病室のカーテンを開けて見舞いにきた両親は和樹が目を覚ましたのを見て泣き崩れていた。その光景を見るだけで和樹は涙腺が崩壊するのを止めることができなかった。

その後わずか3日で和樹は退院した。後で話を聞くとなんと1ヶ月近くも眠っていたらしい。まともに車と直撃したにも関わらず目立った外傷はなく、軽い打撲で済んでいたのにいつまでも目を覚まさないのが植物人間になったのではないかと皆疑っていたらしい。医師はとにかく奇跡だ、と驚いてばかりだった。もしあのままコロナの夢を見ずに目を覚ませなかったら……………そう考えただけで和樹は悪寒が止まらなかった。

「まさか3日とはなあ……………」

「本当によかった。ちっとも目を覚まさんかったけんな。」

と家族からの祝福を受けながら自宅に戻ると、ワンツ！ワンツ！とリビングの方から声が聴こえてきた。

「コロンただいま！」

そう言うや否やコロンは真っ直ぐに和樹目掛けて突進し、体をすり寄せてきた。

「痛ッ！わかったただいまただいま！」

そう応じながら和樹はまたコロンと触れ合える喜びに全身を震わせていた。

「そういえば眠ってるときにコロンが呼んでくれたんだよ。」

ふとあの夢を思い出した和樹は家族に向かって夢の内容を話すと、

「じゃあコロンがあんたを助けたとかもね。」

母は呆れたように答えた。

「本当だって！マジで聴こえたって！」

しかし、両親は全く相手にしてくれない。

「本当なのに……………なあ？コロン？お前が助けてくれたんだよね？」

そう問いかけると、コロンはそんなの知ったことではないと言いたげにそっぽを向いて和樹から離れてしまった。まあいいか、と和樹

は自分に言い聞かせ自室に戻りクラスの皆、野本に無事であることを報告した。とにかく、またこれからはクラスの皆とも家族とも、そしてコロナともずっと一緒にいられる。そう和樹は思っていた。

これから流転の運命が和樹を待ち受けているとも知らないで……

……

#### 第4話 生と死の狭間で（後書き）

どうでしたか？あまりにも急過ぎると思われたかもしれませんが、やはりこの手の話はグダグダと長ったらしく書くのはよくないと思うんです。

ですからこの作品はなるべく短話完結を目標にしていこうと思います。

どうかこれからも応援よろしくお願いします。では次回をお楽しみに？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6351y/>

---

コロシ ~ 僕を変えた一匹の家族 ~

2011年12月11日01時48分発行